

幼児における心的飽和 の 実験的研究(B)

—無限定課題の使用—

島田俊秀・近藤貞子・高橋知子

幼児教育と心的飽和

幼児の精神生活上、重要な役割を果たすものに興味がある。幼児では、遊びや習慣は勿論のこと、注意、知識などの知的行動なども興味の制約を受けるものである。このような幼児の精神生活全体を貫く興味の教育的利用こそ、幼児教育の中心的課題である。

レヴィンは個人に対して最初積極的誘発性④を持っていた事象や事態が繰り返されることによって、積極的誘発性は消失し、その代りに中性的状態やいくぶん消極的誘発性⑤が生じてくる心的位相を飽和、さらに反復することによって、誘発性が全く消極的になる位相を過飽和の状態と定義している。そして精神薄弱児の飽和に関する実験から、心的構造の未分化な段階においては、行動は一方的に固着し、他の行動に移行したり、内容的に移調したりすることは不可能で、いわゆる心的素材の剛直性、堅さなどの特性が表われることを明らかにしている。

子どもの興味は、いろいろな事象・事態に表われるものであるが、レヴィンが示唆しているように、精神構造の未分化な状態においては、当初積極的に興味を示した一定の事象や事態でも、再三反復することによって消極的誘発性⑤をもつようになり、心的飽和状態に達すると、特定の事象や事態のみでなく、あらゆるものに興味を示さなくなる。このような状態では、幼児教育は困難である。したがって、幼児の教育にあたっては、興味消失の状態、つまり心的飽和の要因や状態およびその進行過程を究明し、さらに興味の拡張をはかり、養成することがきわめて重要なことである。我われはこのような観点に立脚し、幼児教育に関する基礎研究の一環として心的飽和の問題に関する研究を試みた。

目 的

カットツ(1・2・3)は空腹と食欲の問題を心理学的観点から考

察し、摂食の進行によって飢餓感の鎮静は次第に飽満の感に移行し、それにもない好物であった食物の範囲が狭くなり、食欲には心理的要因が著しい役割を演ずることを主張した。心的飽和の研究はここに着想の一端を得、レヴィンによって展開されるに至った。

カルステン(1・2・3・5)はレヴィンの指導の下に、一つの動作の反復がその動作続行の傾向にいかにか影響するかの問題を研究した。彼女は図案描き、貼り絵などの課題を用いて実験を行ない、飽和の速さは仕事の構造や人格の特性に依存していることを明らかにした。

また、レヴィンは心的飽和に関する知能の影響についての研究を8~11才の精神薄弱児および正常児を対象に、月の顔の描写と自由描画の課題を用いて実験を行なった。その結果、飽和実験の総持続時間は両群の間に本質的な差異はみられないが、飽和の経過にはある典型的な相異がみられることを明らかにした。

松村康平(1・2・5)は幼児を対象に四角に点と月の顔の描画といった課題を用い、飽和過程に関する実験を行なった。その結果、飽和現象としてみられる図形の変容や図形の悪化の過程には、いくつの特徴がみられ、図形の拡大の傾向は場からの逃避、図形の縮小の傾向は自己の縮小を意味する現象として取り扱うことができる」と主張している。

三浦武(5)は飽和速度に関する研究を行ない、課題が快なる場合と不快なる場合とで、飽和時間および全作業時間がどのように

異なるかを検討し、飽和時間も全作業時間も快なる課題の方が長いという結果を得た。そして飽和時間に関係する条件は課題の興味ばかりでなく、性格的要因や社会的要因などが考えられることを指摘した。

塩田芳久・高橋甚三郎(6)は、「学習における飽きについての研究」を小学校児童を対象に漢字の書き取り作業を課して行ない、飽きに伴う表情動作について細かい観察を行なった。

このようにして、心的飽和に関する研究は多くの研究者によって行なわれてきた。本研究は性格類型の相異によって、作業続行中の行動・心的飽和に達するまでの時間および塗色行動にいかなる特徴が認められるかを実験的に検討する。

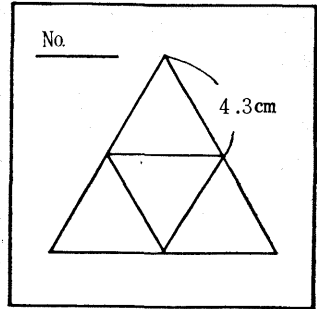
実験方法

(1) 実験課題——課題は従来の研究には図案書き、球ころがし、貼り絵、四角に点と月の顔の描写、自由描画など数多くの課題が用いられた。

本実験の課題は一边8.6 cmの正三角形を一边4.3 cmの小三角形4個に区分したカード(図1)を順次に作業放棄するまで無制限に与えていく「無限定課題」である。

(2) 実験手続き——前述のように一边4.3 cmの正三角形4個からなる大三角形を印刷したカードを与え、予め準備された8色、赤・橙・黄・緑・水・青・黒・灰のクレパスの中から1色ずつえらばせ、小三角形を1個ずつ塗色させ、4個塗り終ったら次のカードを与

図1 無限定課題用カード



え、無制限に塗色作業を続行させる。被験者は1名ずつ、実験者とならんで机前にこしかける。机上には8色のクレパスが無差別に配置されている。

実験者は作業開始前に被験者に1枚のカードを示し、「この大きな三角形の中に小さな4つの三角形が書いてあります。ここにあるクレパスの中から好きな色を使って、この小さな三角形を1個ずつ、好きなように塗ってごらん下さい。全部塗り終わったら、次の新しいカードをあげます、そして、いやになるまで塗って下さい。いやになったらやめても結構です」と教示を与え、塗色作業を始めさせる。被験者が「やめる」という意志表示をしたら、「もつとぬらない？」と作業続行をうながす。もしそのまま塗色を始めたならば作業を続行させる。再度、作業の続行をうながしても塗色を拒否した場合には作業を中断し、作業放棄とみなす。実験者は全実験を通じて、同一の実験者がこれに当たり、被験者に面して、同じように教示を与え、被験者からの質問に対して同じように反応し、全実験を通じて同一程度の緊張を与えるように留意した。

(3) 被験者——心的飽和と性格との相関をみるため、我われは性格類型をローゼンツワイク(7)の「欲求不満テスト」(PFT)を用いて分類した。このテストは欲求不満事態に生ずる攻撃の方向を3つの類型、すなわち、外罰型(E)、内罰型(I)、無罰型(M)に分類している。

各類型は次のような心理的特徴を持っている。

外罰型は、欲求不満場面での攻撃を人や物に向ける型である。この因子が標準よりも高いものは必要以上に攻撃性を有し、また標準以下のものは社会に適應するために必要な適度の攻撃性に欠ける。

内罰型は、攻撃が自分自身に向けられる方向であり、自責、自己批判などの要素を含む内省的な意味合いを持っている。この因子が標準よりも高いものは自責過剰をあらわし、あまり低いものは無反省、無思慮である。

無罰型は、不満を有することをうまくごまかすか、うわべをつくらって攻撃を避けてしまう型である。この型は弁護する傾向であり、寛容の精神と関係する。この因子が標準よりも高いものは寛容というより無関心を示し、あまり低いものは偏狹を示す。被験者の選択は東京家政大学附属みどりヶ丘幼稚園(5才1か月〜6才2か月)35名について面接法で「PFT」を実施し、その中から各々の類型の中で最も数値の高いものから表1に示した人数だけ選択した。

(4) 実験者——被験者に教示を与え、作業開始後は行動記録計を用いて、各三角形の塗色の始めと終りの時間を正確に記録すると同

表 5 作業放棄までの時間の平均

性格類型	E (外調型)	I (内調型)	M (無調型)
平均時間分	40.8	43.0	47.2

表 9 3位相における行動面と作業面の時点の差

位相 類型	S-A	A-B	B-C
E	2.2	9.8*	6.6
I	1.2	2.8	4.4
M	3.2	-1.9	2.7

註 *...0.05>P>0.02

表 6 カードの塗色に要した時間の平均と標準偏差の平均

性格類型	E	I	M
平均時間秒	58.0	49.1	54.1
標準偏差	20.4	18.3	18.5

表 7 介在時間の総和の平均と標準偏差の平均

性格類型	E	I	M
平均時間秒	35.1*	21.4	24.3
標準偏差	23.4*	6.7	7.6

註 *...0.05>P>0.02

目的——無限定課題を用いた場合、作業放棄までの時間、および飽和位相の推
 析(Ⅱ)
 せながら附随して行なわれる行動が多
 い。

表 8 各飽和位相における時点と作業量

位相 類型	S-A				A-B				B-C				C-D		D-E	
	行動観察		作業結果		行動観察		作業結果		行動観察		作業結果		行動観察	作業結果		
	時点	作業量	時点	作業量	時点	作業量	時点	作業量	時点	作業量	時点	作業量	時点	作業量		
E	12.4	10.5	10.2	7.0	21.2	16.2	11.4	11.8	29.8	20.9	23.2	17.0	38.6	24.0	40.8	24.0
I	10.3	8.7	9.1	6.7	20.7	18.9	17.9	15.7	28.8	23.8	24.3	23.0	42.5	42.4	43.0	42.3
M	14.8	8.7	11.6	5.6	22.4	13.2	24.3	14.2	34.2	21.7	31.5	19.4	42.4	29.0	47.2	32.8

表 8 において、A は飽和らしい行動が始めて明らかに現われた点、B は飽和が頂点に達した点、C は過飽和が現われた点、D は作業放棄の意志表示をした点、E は完全に作業を放棄した点である。これらの区別から、S-A 位相を「飽和以前の位相」、A-B 位相を「飽和しつつある位相」、B-C 位相を「飽和の位相」、C-D 位相を「過飽和の位相」、D-E 位相を「指示によって作業続行をうながされた位相」と考えた。

ただし、多くの場合、D と E は同一点である場合が多く、過飽和

移ら幼児の性格特徴の相異による変動がみられるか否かについて分析を試みた。
 分析方法——分析結果は表 5・6・7・8・9 で示した通りである。表 5 は完全に作業を放棄するまでの時間の類型別の平均を算出したものである。
 表 6 は、作業開始より作業放棄までの間に純粹に塗色に要した全時間を塗色したカード数で除した、いわゆる 1 枚のカード(小三角形 4 個)の塗色に要した平均時間とその標準偏差の平均を示したものである。
 表 7 は、介在時間の各類型別の平均と標準偏差を示したものである。ここで介在時間というのは塗色以外の時間、つまりクレパスをとりかえ、次の三角形の塗色に移るまでに要した時間、また塗色済みのカードと新しいカードをとりかえるに要した時間の総和である。

の位相をC—D位相、あるいは、C—E位相と表現する。これらの位相は3人の判定者が別々に実験者と観察者による行動観察と作業の結果について判定して平均を求めたものである。判定の基準は、行動観察の結果については、表4に示したような、飽和行动の継続時間が長くなる、飽和行动の出現間隔がせまくなる、同時におこる飽和行动数が増える、ことなどであり、作業結果については、クレパスの線外はみだし、ぬり方の変動、塗色速度の遅速、介入時間の遅延や短縮である。

表9は、飽和の3位相における行動観察によって判定された時点と作業結果から判定された時点との差の平均とその検定の結果を示したものである。

結果の吟味——以上の結果から次のようなことがいえる。

(1)作業開始より過飽和に達し作業放棄までの時間は3類型の間に有意差は認められない。

(2)1枚のカードの塗色に要する時間は3類型ともほぼ一定であり、また標準偏差の平均の間にも有意差はみられない。

(3)介入時間は、I型・M型間には有意差はみられないが、E型と他の2型間には5%水準の有意差がみられた。また標準偏差の平均においても同様の結果がみられる。

(4)行動観察および作業結果による各位相の時間と作業量を比較すると、いずれの判定結果も各類型内の各位相間にはかなりの差がみられる。また2つの判定方法別の作業量を各類型別に比較すると、

I型は、C—D、D—E位相において、他の2型に比べて特定の特徴がみられる。しかし、表9に示されるように行動面に現われた飽和時点と作業面に現われた飽和時点との時間の差を比較すると、A—B位相において、E型は他の2型に較べてその差は大きい(5%水準)つまり、E型では飽和しつつある過程においては行動面よりも作業面に飽和行动が現われることを示している。

分 析 (III)

目的——本分析は塗色作業開始から飽和状態を経て過飽和に達し、作業を放棄するまでの過程において、作業に用いる色彩の種類がいかに変化するか、また、その変化は、性格の影響をうけるか否か、あるいは、日常幼児がよく用いている色彩や好きな色彩とはいかなる関係にあるかなどについて分析を試みる。

分析方法——本分析にあたって、本実験を始める前につきの2件の予備実験を行なった。

予備実験(1)——目的——幼児は日常いかなる色彩を使用するか、また、この現象には性格による相異がみられるかについて確認する。

方法——各被験者が現在使用しているクレパスのうち、表11に示した色彩の中から水色を除いた7色について、その長さ測定し、最長のものを使用頻度の最も多いものとみなして、最長のものまで順位をつけた。結果——表10に示すように、幼児の色彩の使用頻度は、性格類型間に64(列位差法によって算出)以上の相関関係がみられる

幼児の色彩の好みは表11に示した通りであって、3類型間に0.81以上の相関関係がみられるため、色彩の好嫌には性格による差異はみられなかった。なお、予備実験(I)と(II)との相関関係を各類型ごとに求めると、E型は-0.59、I型は-0.17、M型は0.11である。

本分析に関連して、作業に用いる8色のクレパスは被験者ごとに新品を用いる、教示にあたって小三角形は必ず1色で塗ることなどについて特に留意した。

表12は全作業中(S-I-E)および各位相における8色のクレパスの使用頻度の順位を示したものである。表13は、予備実験と本実験

表10 日常使用される色彩の順位と各性格類型間の相関

色彩 類型	赤	橙	黄	緑	青	黒	灰	類型間の相関
E	2	6	7	4	5	1	3	0.64 0.75
I	1	7	5	4	3	2	6	
M	4	7	6	3	2	1	5	

表11 色彩の好嫌の順位と各性格類型間の相関

色彩 類型	赤	橙	黄	緑	青	水	黒	灰	類型間の相関
E	4	6	1	4	2	2	7	8	0.81 0.82 0.82
I	6	5	1	3	1	4	8	7	
M	8	5	1	4	2	2	6	7	

ため、性格による相異はみられない。

予備実験(II)——目的は本実験に用いる8色の好嫌に性格の相異による特徴がみられるかどうかについて確認する。方法——各色彩を1辺10cmの正方形の画用紙に塗り、この色紙を用いて、順位法によって好嫌を調査した。

結果——実験の結果、

表13 各実験・各位相・全作業間の諸相関

類型	飽和位相 実験例	S-A A-B B-C C-E S-E				
		実験 I	-0.32	-0.75	-0.16	-0.61
E	実験 II	0.57	0.42	-0.42	0.45	0.63
	位相	↑↑	↑↑	↑↑		
		0.02	0.36	-0.24		
I	実験 I	-0.36	0.28	0.59	0.52	0.50
	実験 II	-0.15	0.09	0.08	0.09	0.17
	位相	↑↑	↑↑	↑↑		
		0.79	-0.08	0.32		
M	実験 I	-0.58	-0.64	-0.58	-0.71	-0.54
	実験 II	0.20	-0.44	-0.13	-0.15	-0.04
	位相	↑↑	↑↑	↑↑		
		-0.05	0.41	0.15		

表12 全作業中及各位相における色彩の使用順位

色	類型 位相 彩	E			I			M								
		S	A	C	S	A	C	S	A	C						
		B	C	E	B	C	E	B	C	E						
赤		1	5	5	7	3	4	1	1	1	1	6	1	1	5	1
橙		4	3	2	2	2	1	2	7	8	3	1	4	2	1	3
黄		5	2	4	4	1	5	4	5	4	6	5	2	4	4	2
緑		6	1	3	3	6	2	3	6	2	4	8	5	2	6	8
水		3	8	6	5	5	8	7	2	7	2	3	8	4	3	5
青		2	4	8	1	4	3	5	3	3	7	2	6	3	7	4
黒		8	7	7	6	8	7	6	3	4	5	7	7	7	7	7
灰		7	6	1	8	7	6	8	8	4	8	3	3	6	2	6

間、および本実験の各位相間の相関関係を各性格類型別に示したものである。

結果の吟味——(1) E型の幼児の作業に用いる色彩は、日常使用頻度の多い色彩を用いるか、さもなければ好きな色彩を用いるかのいずれか、さもなければ好きな色彩を用いるかのいずれかであり、その周期は短い。

(2) I型は、全体的に日常使用頻度の多い色彩を用いる。S—AとA—B位相では必ずしも使用頻度の多い色彩は用いていないが、ほとんど同種の色彩を用いている。しかしB—C位相では大きく変動し、B—E位相にかけて、使用頻度の多い色彩を多く用いるようになる。

(3) M型は、全作業中使用頻度の少ない色彩を用いている。各位相間を比較すると、A—B位相とB—C位相には相関関係がみられるが、一般には用いられる色彩の種類は変化に富んでいる。

結論

被験者の構成などに問題はあるが以上の分析から次の結論に達した。

(1) 幼児では、外罰、内罰、無罰の3類型のいずれの性格であっても、飽和に達するまでの時間は一定であって差異はみられなかった。

(2) 外罰型の幼児では、作業に用いる色彩の交換が激しく、その

交換の合間に多くの飽和行動がみられる。また、飽和行動が外面化する以前に介在時間が長くなったり、作業の結果に変化がみられるなど、種々の兆候が観察される。

(3) 内罰型の幼児では、作業中の色彩の交換が少なく、作業の続行中に規則を見出して興味をもって作業を続け、作業を続行しながら附随して生ずる行動がみられる。

(4) 無罰型の幼児では、作業中における興味の方向が不定であって、実験事態より逃避しようとする飽和行動がみられる。したがって、強制力のない自由な行動場面においては、最も飽和し易い性格かもしれない。

ようするに、幼児の無限定課題の作業場面における飽和過程には、幼児の人格的要因が大きく影響することを示唆した結果が得られた。

研究者

東京家政大学 附属みどりヶ丘幼稚園 島田 俊秀
東京家政大学 近藤 貞子
慶応病院 小児精神衛生研究所 高橋 知子

参考文献

- (1) 松村康平：課題遂行の過程よりみたる性格 昭和16、心理学研究 17 卷、p.131
- (2) 松村康平：飽和過程の一考察 昭和17—18、心理学研究、17 卷、p.48
- (3) 佐久間照：心理飽和について p.43、心理 PSYKHE: 1948 No.2
- (4) Lewin : A Dynamic Theory of Personality. 1935
- (5) 三浦 武：飽和速度の実験的研究、都立大学紀要、1953 p.65
- (6) 高橋甚三郎 堀田芳久：学習における飽きについての研究 児童心理 1948、9月号、p.37
- (7) Rasenzweig：絵画—欲求不満テスト解説書(住田・林共訳編)